

東日本大震災後、縁あって岩手県三陸海岸方面にてガレキ拾いに前々年、前年と出かけて行った。これからも行く予定でいる。

ところが、福島県は外から見ると、地震、津波に原発事故が加わり、宮城・岩手県とはあきらかに様相が異なっていた。行って見て少しでも福島の現実を知りたいと思うものの、どんなかたちで訪れたらいいのか戸惑っていた。そこへ、校友会『東北応援ツアー 福島・相馬』案内を見て迷わず手を挙げてみたのだ。

応援ツアーでは、校友のみなさんとごいっしょさせていただき、結果、ほんとうによかった。得たものもいろいろありました。この場をお借りし、感謝するしだいです。

以下、その印象をかんとんにまとめてみました。

1 相馬港の立谷味噌醤油店

相馬港近くの漁港で代々からの醸造所を再開された立谷 OB のお店を伺う。人柄の良さそうな立谷さん、「なぜもっと力尽くで阻止しなかったのか」と津波で失った従業員の方を思い遣る姿が胸をうった。それでも、車窓から見える景勝地の松川浦では、かつての風光明媚な風景を取り戻しつつあるのが見てとれた。復興は進んでいる。

2 福島県 OB 会

バスで、原発事故当日の有様を語ってくれたのは仲川 OB。証券マンで福島に赴任中。原発事故発生直後、福島から脱出しようと数珠つなぎの渋滞に巻き込まれながら、奥様と生まれたばかりのお子さんをやっとの思いで帰郷させた体験談は真実味があった。バスの車窓からは、霊山山麓に幾カ所も積まれた状態の黒いビニール袋群が見えた。除染作業で出た泥やゴミが処分の宛てもなく積まれている。それが山麓の奥、谷底を埋め尽くすばかりに垣間見えた。仲川さんの説明は、詳細で使命感にあふれていた。

3 福島県 OB 会 その2

福島県 OB のほとんどの皆さんが語っておられたのは、家々の除染作業のこと。敷地の土を全て5~10mmはがして、出た泥土は自宅に仮置くという。それを皆さんは淡々とこなしている。そして生活も平穏さを取り戻している。だが口々に、福島県の現在が半分も外に伝わらないもどかしさを表明された。

外からは見えない福島の日常。いきおい作られた風評というマス・イメージがひとり歩きする。ご自身が被爆者の広島県 OB の飛松さんは、自らの体験を込めて言っておられた。「風評は差別である」と。

4 応援ツアーと校友会

福島の食べ物は安全でまちがいなくおいしい（牛、りんご、浪江焼きそば）。校友会の人もくったくがない。相馬馬追い、盆唄と旧磐城藩からの歴史伝承も数多い。風景もどこかで、バスを降りて歩きたいほどだ。もちろん、またゆっくり来てみたい。

それから、ツアー参加の人たち。若い人が多かった。大学院を修了したばかりの男性や今回多かったのは実社会で活躍中の女性たち。頼もしい限りだ。でも、大人しそうで、生真面目で、どこかいちずそうなのは、40年前の立命館と同じだ。